

木曾三川 治水と文化の交流誌

2008

秋

Vol.68

木曾三川

岐阜県揖斐川町

ふるさとの街・探訪記

清流に抱かれた自然と歴史が息づく揖斐川町

エリア・リポート

揖斐川の段木流送と築漁の変遷

気ままに JOURNEY

伝説に彩られた谷波の名刹と、町をあげての「いびがわマラソン」

コラム 木曾三川 一景一話 河口の河川距離標0.0K

歴史ドキュメント 伊勢湾台風第一編

台風災害史上最大の被害をもたらした伊勢湾台風

TALK&TALK 松田 千晴

近代における長良川の舟運(二)

河川改修工事が生み出した石材(川石)の需要



木曾川文庫

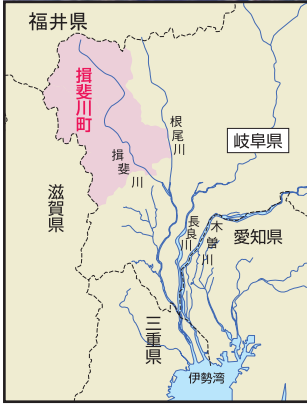


清流に抱かれた 自然と歴史が息づく揖斐川町

揖斐川が貫流する県境の町

岐阜県の最西部に位置する揖斐郡揖斐川町は、北は福井県、西は滋賀県に接する県境の町です。南側は不破郡と揖斐郡池田町・大野町、東側は本巣市に接しています。

町の南西部から北西部にかけて標高一〇〇〇～二三〇〇mの山々がそびえ、冠山（標高二二五七m）に端を発した揖斐川が山間を縫うように流れ、支流の坂内川・粕川が合流します。揖斐川は、町の東南部で扇状地を形成し、市街地・田園地帯となっています。この扇状地以外にまとまった平坦地は少なく、河川沿いの河岸段丘などに集落が点在する山間地となっています。

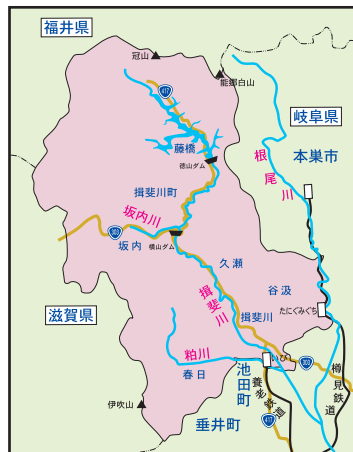


古代大和朝廷との結びつき

町内の縄文遺跡としては、谷汲地域の末福遺跡、揖斐川地域の瑞岩寺遺跡、藤橋地域の塚遺跡などが知られています。末福遺跡からは、中・晩期の縄文式土器とともに丸木舟が発見されています。弥生遺跡は、揖斐川地域・谷汲地域に分布し、上長瀬遺跡（谷汲地域）からは中期前半の条痕文深鉢形土器が出土しています。

揖斐川扇状地一帯と谷汲地域には、条里制の存在が確認されており大化の改新以前より大和朝廷の勢力下にあったことがうかがわれます。揖斐郡は、明治三〇年（一八九七）までは、池田郡・大野郡に分かれて属し、「和名抄」には、大野郡一三郷、池田郡六郷が記載されており、当町域では大野郡大神郷が揖斐川地域三輪に、池田郡では小島郷が揖斐川地域の小島から春日地域・坂内

外にまとまった平坦地は少なく、河川沿いの河岸段丘などに集落が点在する山間地となっています。



土岐氏の台頭と小島頼宮

平安時代から鎌倉時代・室町時代の当地には、大野郡揖斐郷と大神郷を併せた地域に揖斐庄、池田郡小島郷に小

岐阜県の最西部の町・揖斐川町は、揖斐川が中央を貫流する山紫水明の地です。

古代より大和朝廷との結びつきが強く、中世には、美濃の政治的な中心地として重要な役割を担った地域です。平成一七年の合併以降は、地域の特色を生かした観光・特産品開発が進められています。

島庄、春日郷に脛永庄などの荘園が成立する一方で、長瀬郷（谷汲地域）などには依然として中央政府の出先機関である国府が支配する国衙領が並存していました。

南北朝期に、足利氏の部将として活躍した土岐氏は、やがて美濃全体で勢力を伸ばし支配の実権を握っていきます。土岐頼清が池田郡を拠点に、足利幕府を支える有力守護となります。頼清の子頼康は本町春日地域の小島城を本拠地とし、美濃守護とともに尾張・伊勢の守護を兼任しました。当時、小島城は美濃の政治的中心地であり、土岐氏が最も大きな勢力を誇った時期でもありました。

正平八年（文和二年）（一三五三）南朝方が山陰の山名氏の助力を得て京を奪取しました。六月二三日、北朝方の主将・足利義詮は、後光厳院を奉じて京を脱出、土岐頼康ら三千余騎の武士と多くの公家が従い東に落ちのびました。一行は、関ヶ原を抜け垂井から頼康の本拠・小島城下に至り頼宮

ふるさとの街・探訪記



土岐頼清・頼康の墓

よれば、後光厳院は八月二五日に垂井頼宮に移り、九月一九日に京に戻ったとされています。その後、頼康が本拠を厚見郡革手城(岐阜市)に移したため、小島城は美濃の中心地としての地位を失い、隆盛を誇った



二条関白蘇生の泉

を設けています。義詮自身は七月四日には小島を出立、頼康らの助力を得て京の奪回に向かい、後光厳院は、鎌倉にいた足利尊氏に上京を督促する特使を出しています。

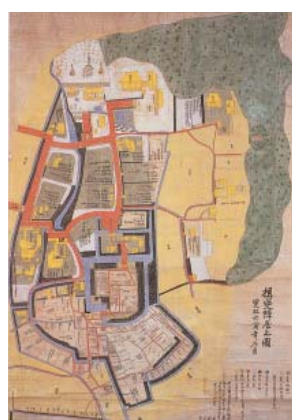
美濃国奉行岡田善同・善政の治水

土岐氏もやがて、戦国時代の梟雄・斎藤道三によって滅亡へと追いやられていきます。当町三輪に、土岐氏の支流・揖斐氏が揖斐城を構え本家・土岐氏をよく支えていましたが、この城も道三の攻撃を受け落城しました。

土岐氏を滅ぼして美濃の支配者となった斎藤氏も、織田信長によって倒され、当地域は、信長に服属した稲葉一鉄などが治めることとなります。その後、豊臣政権を経て、徳川幕藩体制が確立すると、幕府直轄領、尾張藩・揖斐藩・加納藩・大垣藩などの大名領、さらに多くの旗本が所領を有する複雑な地域となりました。やがて、相次ぐ転封・改易によつて次第に整理され、寛永期(一六二四～四四)からはほぼ安定し、正保郷帳では幕府直轄領、尾張藩領、大垣藩領が大半を占めています。当初、三輪の揖斐城にあって三万石を領した揖斐藩西尾氏は元和九年(一六三三)無嗣絶家となっています。揖斐藩断絶にともない揖斐城は破棄され、跡地に美濃国奉行・岡田将監善同の陣屋が置かれました。善同は初め可兒郡姫郷に住し、大久保長安配下の代官でしたが、



岡田将監善同



揖斐陣屋図会

慶長一八年(一六一三)長安が没すると、岐阜米屋町に陣屋を置き美濃国奉行を務めています。岐阜が尾張藩領になり、采地替えもあつて揖斐に陣屋を置くこととなりました。善同は寛永二年(一六二五)に実施された美濃における最初の国役普請の奉行を務めています。

寛永八年(一六三二)父・善同の跡を継いだ善政は、美濃国奉行の職も引き継ぎ、美濃国内の幕府直轄領・一五万九千石余を統轄しました。幕藩体制の確立期であり、彼の治政はその後の行政の基礎となっています。特に治水に関する功績は大きく、普請の細部に至る基準は、後々まで「濃州堤川除御普請仕方」の儀ハ、百年以前岡田将監美濃郡代相勤候節、色々勘弁吟味之上国法相極メ置、連々御普請仕来申候(享保一七年辻甚太郎書状)とされ、善同・善政父子が基盤を作った国役普請制度「濃州国法」は、江戸時代前半の美濃における治水普請の根幹を成すものとなりました。

六分一役番所の変遷

揖斐川の上流より材木・薪などを下流に運ぶ舟運はかなり古くから発達していたようで、文禄三年(一五九四)に豊臣氏の代官古田兵部少輔が、材木六本につき一本の通行税を課す六分一役を定め御蔵人収入としています。六分一役は、江戸時代になってからも引き継がれ、その番所は南方村に伊尾川六分一役番所(後に嶋村に移転)、房嶋村に小島川六分一役番所(後に北方村に移転)の二カ所がありました。これは、当時の揖斐川が、北方村・房嶋村境あたりで小島川(現本流)と伊尾川(のち荒川・五か村井水幹線)の二川に分流



将監堤が描かれた古絵図

ふるさとの街・探訪記



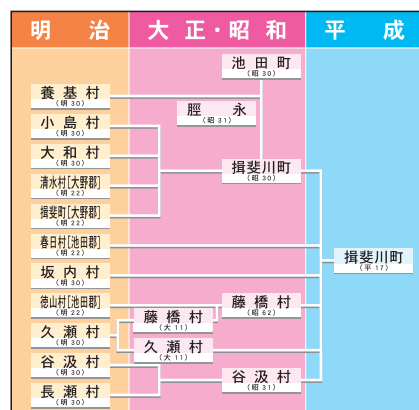
損斐川町歴史民俗資料館展示

量は小島川が格段に多く、利用率が高かったため六分一役運上は、小島川の米一六石に対して、伊尾川が銀二〇〇匁と大きな差がありました。

六分一役番所は、近くの幕府直轄領代官が管轄し、家臣が配属されていました。が、慶長一五年（一六一〇）

頃から農民が川番業務を請け負うようになります。寛永一一年（一六三四）からは、小島川六分一役の運上米一六石を大垣藩が一括して幕府代官所に納めるようになりました。これは、損斐川上流域の多くが大垣藩領であるため、いちいち川留めされて通行税を取り立てられる繁雑さを解消するためでした。伊尾川六分一役番所については、川番業務が順番制の村請負になり、さらに幕末には当番の村が入札請負に出すように変わっていきました。

当地域の舟運の拠点は森前（損斐川町北方）で、上流の北山筋と下流の大垣・桑名・名古屋方面を結ぶ物資の中継地として栄えました。上流は、横山（藤橋地域）まで「奥行舟」という比較的小型の舟がのぼっていましたが、これは江戸時代後期から生産が増えた木炭の運送が多かったようです。森前から「せどり舟」という中型の舟に積み替えて下流に下っていきました。



明治以降の町村変遷

明治四年（一八七二）一月、大野・池田両郡は新たに統合された岐阜県の管轄となり、三輪村（現損斐川町三輪）に両郡の郡役所が設置されました。明治三〇年（一八九七）大野郡が二分され、一部が本巣郡に編入、その他が池田郡と併せて損斐郡が誕生しました。この時点で損斐郡には、一六カ村がありました。

郡役所が置かれた三輪は、中世の損斐城に始まり、江戸時代には損斐藩西尾氏の居城や旗本岡田氏の陣屋が置かれ、城下町損斐町として地域の商業・行政の中心でした。明治以降も、三輪を含めた損斐川地区が商業地として発展し、現在では、電機機器・食品工業などの企業が進出、県事務所など公共機関が集まる行政の中心地として都市化が



損斐高原

進んでいます。

平成一七年に損斐川町・谷汲村・春日村・久瀬村・藤橋村及び坂内村の一町五村が合併、新しく損斐川町としてスタートしました。新損斐川町は、広大な緑と清流がおりなす風光明媚な景観や、イワナやアマゴ、アユが生息する環境が保たれています。これらの自然を生かして、魚釣りや水遊び、キャンプ、スキーなどが楽しめるレクリエー



鮎釣り

二〇〇八年春、「徳山ダム」が完成しました。

昭和四十六年（一九七二）の調査開始より三七年度の月日を経て、今年五月に徳山ダムが完成しました。総貯水量は六億六千万m³で浜名湖の約二倍、ダム湖の広さは諏訪湖を上回るといって、まさに日本最大の人造湖です。流入量が多い時に水を蓄え洪水を防ぐ「洪水調節」、川にいつも一定の水が流れているように流量を調節する「流水の正常な機能の維持」、クリーンなエネルギーを生み出す「発電」、新たな水源としての「利水」の四つの目的を持つ多目的ダムで、「損斐の防人」「濃尾の水瓶」として十分にその機能が発揮されることでしょう。



ダム湖は、先祖伝来の郷土との離別を余儀なくされた旧徳山村の人々の意見をいれて「徳山湖」と名づけられました。緑豊かな徳山の地に、多くの人々の思いが積み重なって誕生した広大な湖が、新たな財産として、町の未来に大きな役割を果たしてくれることが期待されます。

シヨンの場が整備されています。また、多くの参拝者が訪れる華厳寺や横蔵寺、古くから利用されている伊吹山麓の薬草など多様な伝統文化を伝える歴史的資源にも恵まれています。こうした地域の個性を生かしながら「自然と歴史が育む ふれあい」と活力のある健康文化都市をめざして、まちづくりが進められています。

参考文献

『損斐川町史 通史編』昭和四十六年 損斐川町
『岐阜県の地名』平成元年 平凡社
『損斐川町勢要覧』平成一九年 損斐川町

木曾三川 一景一話

今号の一景
河口の
河川距離標 0.0k

木曾川の河口をしめす「0.0k」の河川距離標は、どこに設置されているのでしょうか。今回は、その場所を確かめてみましょう。木曾川の右岸堤防を下ると、東名阪自動車道の手前で「河口から10.0k」の標識が目に入ります。その川側には、見慣れたコンクリート製の河川距離標が確認されました。

さらに下って、国道23号名四国道の木曾川橋梁の下をくぐり抜けると、右手堤防下に「明治改修着工之地」の碑が見えます。明治20年(1887)4月、この地点から「明治改修」と呼ばれている木曾川下流河川改修工事が開始されました。

当時、この地には、木曾川の中に張り出していた横満蔵輪中がありました。それより下流は、万延元年(1860)の高潮洪水によって流された松蔭輪中が、荒地地のままとなっていましたから、横満蔵輪中の下流側が事実上の木曾川河口でした。

明治改修では、木曾川の流れを良くするため、横満蔵輪中の約半分を開削して木曾川の川巾をひろげるとともに、海へ向かって約1,820mの土堤防と、その先に約2,860mの石堤防が作られました。

このとき、海中に突き出た土堤防の先端が木曾川の河口として定められて、河川距離標「0.0k」が置かれました。これは、松蔭輪中の復活によって、この地点が新たな河口となることを見越してのことでした。



右岸 0.0k の河川距離標

その後、この土堤防を基にして、河口部に輪中堤が作られて「松蔭輪中」が甦り現在の地形になりました。これを記念した「再墾松蔭新田碑」が、河川距離標「0.0k」横の堤内地に建立されていて、その碑文から当時の経緯を知ることができます。

それより先の石堤防は、「導流堤」

として木曾川の流れを良くするため現在も働いていて、河口の堤防上からその全容を見ることが出来ます。この「導流堤」は、平成18年、土木学会選奨土木遺産として選定されています。



導流堤

これら河口部の土堤防は、その後洪水や高潮と闘いながら維持されてきましたが、昭和34年(1959)の伊勢湾台風によって、当地域は壊滅的な被害を受けました。このため高潮の影響を受ける河口部の区域は、伊勢湾台風級の高潮を防げるような高潮堤防として改築されることとなり、昭和37年度に完成しました。

したがって、河川距離標はすべて作り替えられ現在では、明治時代に設置された河川距離標を見ることが出来ません。また、河川距離標の形状も高潮堤防区間では、堤防のコンクリート壁に打込まれた「鉋」になっていますから、距離を示している標識によってその存在が確認できる状態です。

木曾川の河川距離標「0.0k」は、文字どおり河口にありました。堤防は河川距離標から10mほど先から大きく右に曲がって、木曾川と直角の方向になります、ここに国と三重県の杭が立てられ、河川堤防と海岸堤防の境界が示されていました。

木曾川の左岸に廻ってみましょう。右岸側と同様に高潮堤防が連続していますから、河川距離標の存在は、標識を目印にしてようやく探し当てることができます。木曾川左岸の最下流の河川距離標は「1.8k」でしたが、河口までは、まだ100mほどありそうでしたから、左岸の河口は1.7kというべきでしょう。この地点がかつての河口です。ここでも堤防は大きく左に曲がって鍋田川にはいますが、ここには、支川鍋田川堤防との管理境界でしょうか、管理境界杭が設置されていました。

しかし、現在では鍋田川の河口を横断すると「木曾



左岸最下流の 1.8k 河川距離標

岬干拓地」があります。その中には自由に立ち入りができませんが、その先端が現在の河口となり、河川距離標「-2.0k」が設置されています。

河辞苑

※河川に関する用語をわかりやすく解説します。
木曾川水系流域委員会 用語集より

◆高潮堤防(たかしおていぼう)

台風の接近に伴う気圧低下による吸い上げ、風による吹き寄せ、高波浪等を要因とした高潮(海面が通常より著しく上昇する現象)や越波による被害を防ぐ堤防のことです。

◆導流堤(どうりゅうてい)

砂の堆積や川の深掘れを防ぐために、川の流れを導くように河口付近に設置される堤防のことです。

AREA REPORT

岐阜県揖斐川町

揖斐川の段木流送と

築漁の変遷

揖斐川町を貫流する揖斐川は、さまざまな形で流域の人々の暮らしを支えてきました。なかでも、江戸時代から昭和初期まで続いた段木の流送は、上流の山村の貴重な収入源となってきました。現在は、豊富な水量を利用した電力開発が進んでいます。

電力開発が進む揖斐川上流

白山山地の冠山を源流に伊勢湾に注ぐ揖斐川は、全長一二・kmのうち上流半分が揖斐川町内を流れています。平野部に出るまでの河川勾配が急で、流量も豊富なため、水力発電に適した河川ですが、その利用状況は木曽川筋などに比べると開発途上にあります。

揖斐川本川筋における初期の発電施設は、大正から昭和一〇年代に揖

斐川電気(現在のイビデン株)

が建設した水路式発電所で、支川・広瀬川(坂内川)に西横山発電所ほか二カ所と本川筋に東横山発電所を運用



イビデン東横山発電所

していました。西横山発電所は、横山ダムの建設で水没しましたが、ほかは今後も稼働しています。

ダム式発電所としては、昭和一五年(一九四〇)に運用開始された西平発電所(西平ダム)が最初で、その後、昭和二八年(一九五三)に久瀬発電所(久瀬ダム)、昭和三九年(一九六四)に横山発電所(横山ダム)が運用を開始しました。

今年の春完成した徳山ダムを利用する徳山発電所が平成二六年(二〇一四)に稼働開始の予定で、これにより揖斐川の電力開発が大きく進むこととなります。

上流から宮前までの段木流送

電力開発が進むダムが建設される以前の揖斐川は、木曽川・長良川と同様に木材の流送が行われていました。揖斐川流域は、木曽川流域のような檜などの美林はありませんから、雑木から挽出する「段木(だんぼく、つだこ)」と呼ばれる薪材が主要な林業生産品でした。段木の語源は、もともと年貢米の代わりに大垣藩に納めていた「殿木」が変じたと言われています。揖斐川上流域から流された段木は、当地域の舟運の拠点であった森前(揖斐川町北方)で收拾していました。

明治時代以降は、揖斐川段木会社(「伐子」と契約して段木を買い集めて下流の消費地に運びました。伐子には段木づくりを専業としてい



段木

た「杣」のほか、農業の合間に山に入る農民が携わっていました。伐子は、伐り出す量に応じて仕入金と称する前借りをして、生活費や税金に当てました。旧徳山村などの農民は、雪解けとともに山に入って伐り出すのに適した木に印を付けて廻りました。山見を終えず、わずかな田仕事をすませると土用の丑まで自分の印を付けた木を切り倒す「根切り」に従事します。土用の丑までと限ったのは、この時期を過ぎると木が水を吸って重くなり流送中に沈むものが多くなるからだそうです。根切りを終えると田仕事に戻り、七月末に再び山に入って倒した木を細かく刻んで二尺二寸(約七〇cm)の段木にします。段木は、よく乾かす必要がありますから、日当たりの良い平らな場所に積んでおきます。この春から夏にかけて伐り出す「春伐り」に対して、秋の彼岸頃に根切りをして、十一月頃までに段木にする「秋伐り」も行われました。積まれた段木を段木会社が帳面につけていき、これが受け渡しとなり



揖斐川(揖斐川地域)

AREA REPORT



森前土場(揖斐川町歴史民俗資料館展示)

労働でしたから徳山の屈強な若者二、三〇人ほどが会社で雇われて従事しました。徳山で落としてから森前に着くまで一五、二〇日かかり、川面いっぱいには段木

ます。受け渡しが終わった段木を谷川に落とし、揖斐川まで川出しするのめ伐子の仕事で一二月にいつせに行われました。水量の少ない谷川では、水を堰とめ一気に流してその流勢で段木を押し流す「鉄砲」という方法がとられました。

段木の川下げと川揚げ

川出しされた段木を森前まで流す川下げ作業は、段木会社よって一二月から正月にかけて行われました。段木は、長い時間水に浸かるとに沈んでしまうので短期間に流す必要がありました。各谷からいつせいに落とされた段木は

揖斐川いっぱいに広がり、簡単に流れていくものではなく、川に入ってから押し出したり、岸の岩にひっかかった段木を取り出す作業が必要でした。腰まで水に浸かって行う川下げは、危険で重

が流れていく光景は壮観なもので多くの見物人が出たとのこと。流された段木は、森前の川岸に設けられた土場(段木置場)に川揚げされました。川には、流れ着いた段木を留めるための猪の子を組んだ段木留が対岸まで続き、途中に舟が通れるように食い違いが設けてありました。段木留の上流部に溜まった段木は、長い鳶口を使って舟に引き上げ土場に運びました。この川揚げ作業には約一カ月かかったそうです。

この段木流しは、道路の整備や、発電所建設によって昭和七年頃に姿を消しました。

揖斐川の築漁の歴史

揖斐川の冬の風物詩であった段木流しはなくなりましたが、夏の鮎の築漁は時代を追うごとに盛んになりました。築は、鮎が成長して八、九月頃、産卵のため下流に下るところを、川に竹や杭などで堰を作って流れを一カ所に集め竹の簀を敷いてそこに落ちる鮎を捕まえる仕掛けで、その歴史は江戸時代以前にさかのぼります。揖斐川で最も古い築は房嶋築で、文禄三年(一五九四)古田兵部少輔が河川運上改を行なった際、房嶋築は六分一役運上に含まれ、以後、運上築と称しました。房嶋築の起源について、『美濃国諸旧記』に正平八年(文和二年)一三三三の後光厳院小島行幸の折、清水郷士杉

原与左衛門が鮎を献上して、杭瀬川(揖斐川)の漁業権を得たという話が載っています。真偽はともかく、中世末期には房嶋築が独占的な漁業権を獲得していたものと推察されます。江戸時代を通して房嶋築は築打ちの独占権を持ち、その権利は年限りで入札にかけられ、鮎の獲れ高にかかわらず落札した額面通りの運上金を納めることになっていました。明治になってからは、鑑札制となり築の数が増えました。

現在の観光やな

本曾三川では、長良川の鮎が有名ですが、揖斐川の鮎もかなりの漁獲量を誇っています。揖斐川の水は、長良川に比べて水温が低く流れが速いので、鮎の生育は遅いものの身が締まって味が良いと言われています。以前は、岐阜の市場に漁師が持ち込んで取引されていましたが、八月下旬までは長良川産が高値で、八月下旬からは揖斐川産が高値で取引されていたそうです。

太平洋戦争後は、河川の砂利採取や水質の変化によって鮎の産卵に適した場所が少なくなり天然鮎が減少したのに対し、消費量は増える傾向にありました



観光やな



観光やな

から、昭和二四年頃から稚鮎を琵琶湖から購入して放流が始められました。当初は年間一〇〇kg(五万匹)ほどでしたが、今では毎年二五〇〇kg程度が放流されています。漁業者は揖斐川中部漁業組合に所属しており、ティナ網・投網・釣りなどの漁法で漁を行っています。

現在は、築と言えばもっぱら「観光やな」を指し、揖斐川町内では揖斐川に六カ所が営業しているほか、根尾川に三カ所、坂内川に一カ所の観光やながあります。七月から一〇月にかけてのシーズン中は、築で鮎のつかみ獲りに夢中になる親子連れや、涼しげな川沿いで鮎料理を楽しむ観光客で賑わいます。

参考文献

- 『揖斐川町史 通史編』昭和四六年 揖斐川町
- 『揖斐川』昭和五四年 揖斐郡教育会
- 『本曾三川流域史』平成四年 建設省中部地方整備局

気ままに JOURNEY

岐阜県揖斐川町

伝説に彩られた谷汲の名刹と、町をあげての「いびがわマラソン」

見事な紅葉がどこまでも広がる山々と、その合間を縫って走る溪流。豊かな自然に恵まれた揖斐川町で、秋の風情ただよう古刹を訪ねてみました。また、この季節には全国から市民ランナーが集う、伝統の「いびがわマラソン」も開催されます。



横蔵寺

奥深い山々が連なり、その谷間を幾筋もの溪流が流れる揖斐川町には、揖斐峡、小津溪谷、不動滝、花房滝、夜叉ヶ池など、素晴らしい景勝地が列挙できないほど点在しています。さらに、山里ならではの風情漂う温泉や、豊かな自然を生かした釣り、キャンプ、スキーなどのアウトドアレジャー施設も数多く、まさに大自然を満喫できるエリアです。

こうした自然環境に恵まれた揖斐川町ですが、歴史的遺産にも見るべきものが豊富な地域で、全国的に有名な寺院に貴重な文化財が残っています。

西国三十三番満願霊場・華厳寺

岐阜市方面から国道一五七号を北上して、谷汲山大橋で根尾川を渡ると揖斐川町の北東部・谷汲地域に入ります。県道をしばらく進むと谷汲山華

厳寺の門前に到着です。華厳寺と言われてピンとこない人でも「たにぐみさん」なら聞いたことがあるでしょう。ここは、巡礼の終着地・西国三十三番満願霊場。信仰の対象としての重みとともに、四季折々に多彩な表情を見せて観光客を引きつけます。



華厳寺

華厳寺の創建は、平安京遷都から間のない延暦一七年（七九八）、開祖は豊上人と言われています。当時の官道・東山道から北にそれたこの地に、なぜこれだけの寺院が建立されたのか見当が付きませんが、その縁起は伝説として残っています。

奥州会津の大領が、

苦行の末、霊木を手に入れ、京で十一

面観世音像を完成させました。この観音像を奥州へ運んでいこうとしますと、観音像は、御笠を被り、わらじを履いて自ら歩き出しました。途中、赤坂（大垣市赤坂）にさしかかったとき、



華厳寺

観音像は立ち止まり、「遠く奥州の地には行かない。我、これより北五里の山中に結縁の地があり、其処にて衆生を済度せん」と述べられ、北に向かって歩き出しました。そうして谷汲の地に辿り着いた時、観音像は歩みを止め、一歩も動かなくなりました。大領はこの地こそが結縁の地だろうと思い、山中に庵を結び、近くに住む豊上人と力を合わせて山谷を開き、堂宇を建てて尊像を安置し奉りました。

美濃の正倉院・横蔵寺

「たにぐみさん」から西のさらに奥まった山中にたたずむ両界山横蔵寺は、岐阜県屈指の紅葉の名所。燃えるような赤と秋の青空のコントラストは息をのむ美しさ、対象的にライトアップされ闇に浮かぶ赤はしっとりとした幻想的です。

横蔵寺も寺伝によれば創建が延暦三二年（八〇三）という古刹です。縁起では、最澄が桓武天皇の勅願によって比叡山延暦寺を開き、五山を建立した



横蔵寺

その一つで、本尊の薬師如来は最澄の彫刻であったとされています。

この薬師如来にも華厳寺の観音像とよく似た由緒が残っています。最澄は、比叡山の本尊を彫った霊木の余材で仏像を彫り、それを祀る場所を探して各地を旅し、この地で休息していると仏様が横に臥せてしまい起こそうとしてもびくとも動きません。そこで最澄が、「仏がこの山中に留まりたいとお考えなら、この地に安置しましょう。」と言いますと、仏様は自ら起きあがったそうです。

横蔵寺は、木造深沙大將立像や木造大日如来坐像、木造十二神將立像など二二体の国重要文化財をはじめ数多くの仏像・絵画・書籍を所蔵していることから、「美濃の正倉院」とも言われ、舍利堂に安置された妙心法師のミイラでも有名です。

伝統のいびがわマラソン

谷汲地域の古刹が紅葉の名所として多くの観光客で賑わう季節に、揖斐川町最大のイベント「いびがわマラソン」が開催されます。昭和三十三年（一九八八年）に第一回大会が開催された時は、東海三県で初めての日本陸上競技連盟公認フルマラソンとして注目を集めました。以来、毎年、全国から市民ランナーが、揖斐川沿いのコースを駆けぬけていきました。

本格的な市民マラソンの大会が全国各地で開催されるようになってきた中で、いびがわマラソンのコースはアップダウンが激しく、タイムが出にくいコースです。それでも、全国のマラソン愛好家の間では、非常に評判の良い大会で、参加者からは、「給水、給食が充実している」「お風呂にすぐ入れ

る」など運営面での心づかいを称賛する声が聞かれます。

一四〇〇名をこえるボランティアが「参加した人、みんなが楽しめる、温かい対応を合い言葉に運営を支えています。とりわけランナーのみなさんが一様に口にするのが、「沿道の声援がすごく、励みになった」という言葉です。その応援は「日本のボストンマラソン」と言われているほどで、町民がこぞって沿道で声援に声をからします。主催する揖斐川町では、小中学校が登校日になり、子どもたちは手作り



の横断幕やメガホンを手に、楽器演奏などさまざまなアイデアで応援、大会を盛り上げます。

今年も、第二回大会が一月九日に開催される予定となっています。当日は、誰でも気軽に参加できる「いびがわウォーキング」も同時開催。加えて、揖斐川町の魅力を満喫できる観光地へ無料バスも運行されます。伊吹山の麓で薬草を使った薬草風呂が堪能できる「かすがモリモリ村」、プラネタ

リウムがある「星のふるさと・藤橋城」、そして谷汲もみじまつりへと思い思いに足をのばして、身も心もリフレッシュする秋の休日を楽しんでみてください。



星のふるさと・藤橋城

揖斐川町の歳時記

揖斐祭り

毎年5月4日・5日

江戸時代享保年間に始まったとされている300年余の歴史をもつ三輪神社の例祭です。豪華絢爛な5輦の芸やまが神社境内に曳き入れられ、その舞台上で演じられる子供歌舞伎は多くの観光客を魅了します。

【開催場所】三輪神社周辺



三倉の太鼓踊り

毎年8月15日

鎌倉時代にはじまったといわれ、源氏の武将達が戦の出陣やあるいは戦に勝利したときの祝いに踊られたものと伝えられる。太鼓の踊り手が背負うシナイは4mあまりの竹に和紙をはさんだもので、白、赤、緑の3色に鮮やかに色分けされている。

岐阜県重要無形民俗文化財



【開催場所】三倉 峯神社（久瀬地域）

イベントカレンダー

・谷汲さくらまつり	4月
・揖斐高原花桃フェスタ	5月
・谷汲ゆり園	6月
・夜叉ヶ池伝説道中まつり	7月下旬
・いびがわの祭り	8月初旬
・春日モリモリまつり	10月
・いびがわマラソン	11月
・谷汲・横蔵寺もみじまつり	11月
・豊年祈願祭	2月



交通のご案内

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋 大垣IC
東名・名神高速道路(約40分) 国道258号・国道21号・国道417号(約50分)

◆公共交通機関をご利用の方

大垣駅 揖斐駅
大垣駅 谷汲口駅
養老鉄道(24分) 樽見鉄道(41分)

お問い合わせ

◆揖斐川町役場◆

〒501-0692 岐阜県揖斐郡揖斐川町三輪133番地
TEL 0585-22-2111(代) <http://www.town.ibigawa.gifu.jp>

伊勢湾台風

第一編

台風災害史上最大の被害を

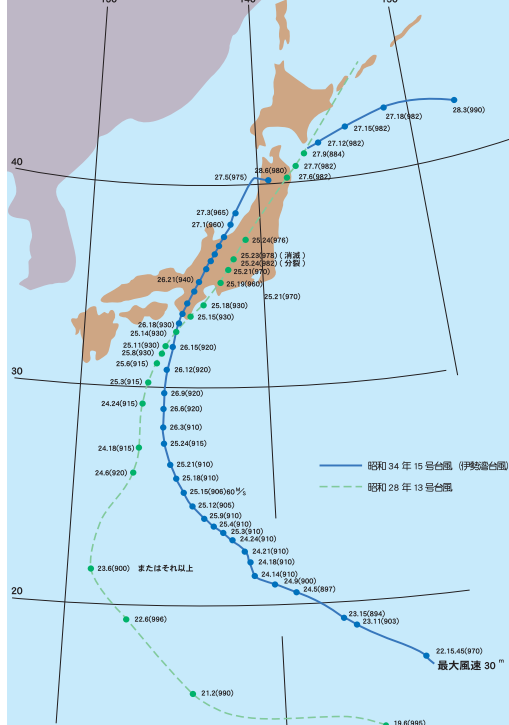
もたらした伊勢湾台風

昭和三四年九月二六日、超大型台風に成長した第一五号台風は、伊勢湾沿岸一帯に想像を絶する大きな被害をもたらしました。史上最大の被害を出した背景には、台風の規模とともに、いくつもの悪条件が重なっていました。

史上最大の伊勢湾台風発生

昭和三四年九月二六日二一時五分、伊勢湾台風が名古屋港に最も接近した時刻です。死者・行方不明者五〇九八人の犠牲者を出した大災害。平成七年一月の阪神淡路大震災発生までは、戦後最大の自然災害と呼ばれ記憶に新しいところです。

のちに「伊勢湾台風」と呼ばれるようになった台風第一五号は、昭和三四年（一九五九）九月二日マリアナ群



台風経路図



三川河口部の浸水状況

島付近で発生した弱い熱帯性低気圧が、急速に発達して二二日九時には台風第一五号となり、二六日六時には、潮岬の南南西

およそ五二〇kmの海上に到達、速度を増しながら毎時三五kmで北に向かっていました。

この時の中心気圧は九二〇hPa（ヘクトパスカル）、最大風速毎秒六〇m、暴風圏は、東側が半径四〇〇km、西側が半径三〇〇kmにおよび、昭和九年（一九三四）室戸台風、昭和二〇年（一九四五）枕崎台風に次ぐ超大型台風へ発達しました。

東海地方では、前年の昭和三十三年（一九五八）狩野川台風によって伊豆半島が大災害を被り、伊勢湾沿岸でも六年

前の昭和二八年（一九五三）には第一三号台風が潮岬の東に上陸し伊勢湾・三河湾で大災害を被り、その災害の痛手から立ち直っていませんでした。

このため、東海から近畿にかけての沿岸域では、真剣に台風の進路を見守っていました。これは、台風がこのまま北進し紀伊水道の西側を通過すると大阪湾が、また、東に進路を変え潮岬から北東に進むと伊勢湾が、ともに夜の満潮時と重なるため高潮による重大な被害が予想されるためです。

高潮災害へ最悪のコース

伊勢湾台風は、二六日一四時には紀伊水道の南約二〇〇kmの海上に達し、ますます勢力を強め、六年前の昭和二八年（一九五三）伊勢湾沿岸に大被害をもたらした台風第一三号と同様なコースを辿り始めました。

台風第一三号は、潮岬の東を通り尾鷲付近を過ぎてから、やや東向きに



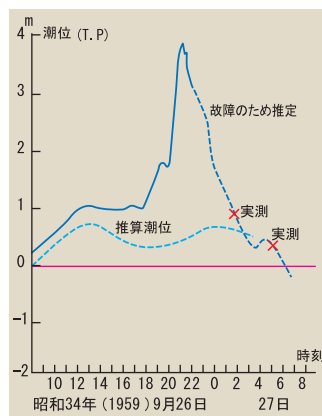
台風経路図

進路を変えて伊勢湾口を横断し、知多半島の先端をかすめて三河湾を北東に縦断しました。上陸時の中心気圧は九五三hPaでした。

一方、伊勢湾台風は、一八時過ぎ潮岬の西方およそ一五kmの地点に上陸、潮岬では最低気圧九二九五hPaを観測しました。これは昭和二〇年（一九四五）の枕崎台風に次ぐ戦後二番目の低い気圧を記録しました。

一九時には奈良県と和歌山県の県境に進み、二〇時、奈良県中部。二一時には鈴鹿峠付近を通過して伊勢湾に最も接近し、二二時には岐阜の西北に達して、伊勢湾にとって最悪で

歴史ドキュメント



名古屋港の潮位曲線

ある伊勢湾の西側を北東へのコースをとりました。勢力はほとんど衰えず、中心気圧は九四五hPaでした。

台風はその後進路をほとんど変えず、二三時には岐阜県白川村付近を通り、二七日〇時には富山の東を通って中心気圧は九六〇hPa、毎時七五kmの速度で日本海に抜けました。

異常な高潮 三・八九メートル

岐阜では南南東の平均風速毎秒三二m。名古屋では南南東の平均風速毎秒三七m、瞬間最大風速は毎秒四五・七mを観測しました。これは名古屋気象台開設以来の記録でした。

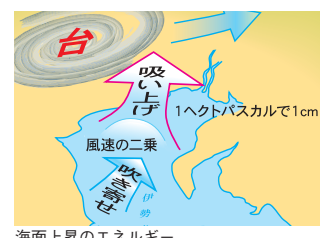
台風が潮岬に上陸したのが一八時、富山から日本海に抜けたのが二七日〇時、実に六時間で中部地方を縦断したことになります、その平均速度は毎時六五kmでした。

台風に吹き込む風は反時計回りですから、伊勢湾では台風が西側を北上した場合に南風が吹き続け高潮が起きます。高潮の大きさは、風による「吹き寄せ効果」と気圧による「吸い上げ効

果」によって生じる潮位偏差で表されます。

吹き寄せによる海面上昇は風速の二乗に比例し、吸い上げによる海面上昇は気圧が一hPa低くなると約一cm上昇すると言われていますから、台風の進路と最大風速と中心気圧が高潮の大きさを左右します。

伊勢湾台風は巨大なエネルギーは、二六日二時三五分、名古屋港では三・八九mの潮位を記録しました。昭和二八年第一三三号台風の潮位は二・三三mでしたからこれを大きく上まわりました。偏差は三・五五mで第一三三号台風の一・三二mの実に三倍の偏差となって現れました。



巨大台風 類を見ない気圧の低さ

木曾三川下流部を中心として半径一五〇kmの範囲内に接近した台風は七七個(二九一年以降)、そのうち最低気圧が九〇〇hPa以下の大型台風は、昭和五四年(一九七九)第二〇号台風の八七〇hPaを筆頭に八個ありましたが、多くの台風は上陸時点では勢力を弱め、中心気圧も九四五hPa以上に上昇しています。

そのなかで、強い勢力を保ったまま上陸した最初の台風が伊勢湾台風

順位	台風の名称	上陸時中心気圧 (hPa)	上陸場所
1	昭和36年台風第18号 (第2室戸台風)	925	室戸岬西方
2	昭和34年台風第15号 (伊勢湾台風)	929	瀬峰西方
3	平成5年台風第13号	930	薩摩半島南部
4	昭和26年台風第15号 (ルース台風)	935	串木野市付近
5	平成3年台風第19号	940	佐世保市南
5	昭和46年台風第23号	940	大隅半島
5	昭和40年台風第23号	940	安芸市付近
5	昭和40年台風第15号	940	牛深市付近
5	昭和30年台風第22号	940	薩摩半島南部
10	平成19年台風第4号	945	大隅半島
10	平成16年台風第18号	945	長崎市付近
10	平成2年台風第19号	945	白浜町付近
10	昭和45年台風第9号	945	長崎市付近
10	昭和39年台風第20号	945	佐多岬
参考	昭和28年台風第13号	953	尾鷲
参考	昭和33年台風第22号 (狩野川台風)	960	神奈川県東部
参考	昭和9年室戸台風	911.6	室戸岬
参考	昭和20年台風第16号 (枝城台風)	916.3	枝城

我が国へ上陸した台風の中心気圧 ワースト10

でした。最低気圧は八九五hPa、潮岬への上陸時は九二九hPaでした。その後、昭和三六年(一九六一)には第二室戸台風が発生し、最低気圧八九〇hPa、上陸時には九二五hPaを記録し、伊勢湾台風を僅かに上まわりました。

台風の記録が整備されているのは昭和二六年(一九五一)以降のことですから、それ以前の著名な台風として、昭和九年(一九三四)の室戸台風九一一・六hPa。昭和二〇年(一九四五)の枕崎台風九一六・三hPaがあります。

名古屋港の満潮時と三時間差

伊勢湾台風が名古屋港に最も接近したのは二六日二時三五分、この日の満潮時間は二七日〇時四五分でしたから約三時間の差がありました。また、当日の月齢は二四・〇で、小潮に近い状態でした。この時の台風の影響を考えない時の名古屋港の推定満潮位は標高〇・五八m、伊勢湾台風による最高潮位発生時の推算潮位は標高

〇・三四mと推定されています。

海面は一定ではなく常に変動しています。

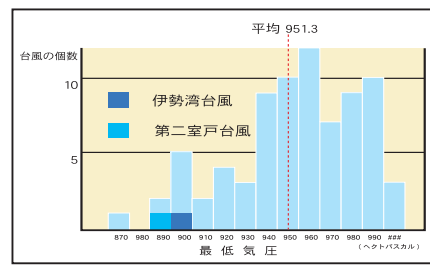
このような海面の変動は、地球・月・太陽の位置の変化にともなう半月周期の変動と、半日周期の変動があります。

半月周期の変動では、一日の潮位差が最も大きい時を大潮と言ひ、新月(旧暦一日)と望月(旧暦一五五)に起こり、満潮位が最も高くなります。逆に上弦や下弦では、一日の潮位差が小さく小潮と呼び、満潮位も低くなります。

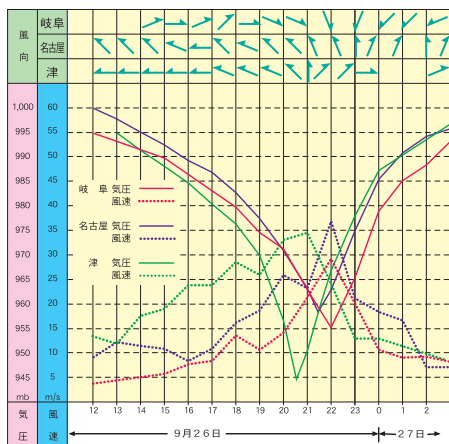
半日周期の変動では、月や太陽が最大高度となる時間付近で発生しますが、その周期は一二時間二五分程度です。

従って、海面が高い大潮の満潮時に台風が接近すると、大きな高潮となり、干潮時には潮位が低く高潮の影響が小さくなるがあります。

平成二〇年の名古屋港の予定潮位を見ますと、最高満潮位は標高一・二九m、月別では九月、一〇月が最も高く、最も低い一月では標高〇・九四m。最低満潮位は二月、三月で標高〇・〇四mと推算されています。



歴史ドキュメント



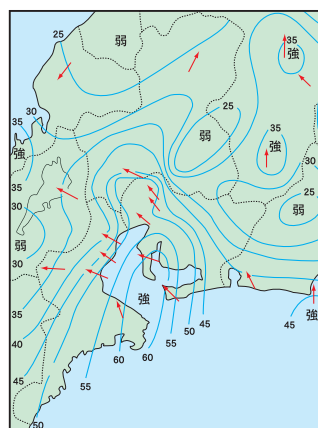
主要地点の風速・風向・気圧の変化

伊勢湾台風は、河口部の高潮災害にとどまらず、内陸部においても強風と豪雨によって、台風の進路に近い揖斐川・長良川を中心に大災害をもたらしました。

内陸部では大風水害

一方、干潮位は、最低干潮位が標高マイナス一・六三m、最高干潮位が標高〇・三五mで、八月、九月が高く、二月に低くなっています。

最高満潮位と最低干潮位の差は、実に二・九二mもありますから、高潮の影響を受ける沿岸地域では、台風の通過時間と潮位の関係は極めて重要なこととす。



瞬間最大風速分布図

暴風は二二時二〇分、南南東の最大風速毎秒三三・五mをピークに徐々に低下しましたが、二〇時から四時間にわたって毎秒一五m以上の強風が吹き続けました。

台風の進路にあたった白鳥(郡上市)では、二三時に最大風速毎秒一七・五m、高山では、二七日〇時二九分、瞬間最大風速毎秒一八・〇mを記録しました。

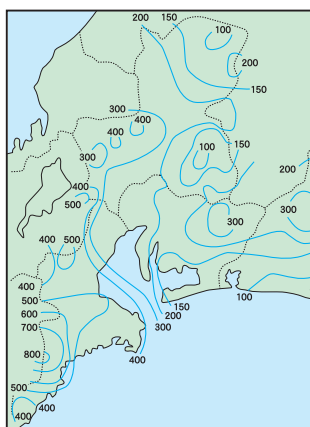
短時間の集中豪雨

これらの強風による被害は、岐阜県下全域に及び、岐阜県史上最大の風水害となりました。

雨が降りました。

二六日は、暴風雨圈に入るとともに強い雨が降り始め、台風の中心が最も近づく直前には、揖斐川、長良川の上流域では、一時間雨量は七〇〜八〇mmに達しました。

降雨量は、台風の進路に近い揖斐川・長良川流域に多く、木曽川流域に少ない「西高東低」で、総降雨量もさほど大きくないものの、短時間に降雨量が集中し、中小河川での氾濫が相次ぎ、揖斐川・長良川とも既往最大の洪水となりました。



総雨量分布図

揖斐川・長良川で計画を上まわる出水

揖斐川本流では、二六日二〇時五〇分揖斐川洪水警報が発令され、上流部では急激な水位上昇があり、下流部の河川水位は、警戒水位を越えてさらに上昇することが見込まれるとして、水防に万全を期するよう呼びかけました。

二三時〇〇分には、再び揖斐川洪水警報が発令され、計画高水位程度の大出水となるとして嚴重な警戒を

呼びかけました。その後、一部の地区では計画高水位を越える既往最大の水となり、牧田川

では養老町根古地地先で破堤氾濫しました。



牧田川の氾濫状況

長良川ではやや遅れて、二七日〇時三〇分長良川洪水警報が発令され、中下流部では警戒水位を一五・二〇m上まわる洪水が見込まれるとして嚴重な警戒を呼びかけましたが、四時に発令された洪水警報では、計画高水位を越える大洪水となるから嚴重な警戒をするようにと、洪水の規模がさらに大きくなるが予想されました。

結果的には、岐阜市芥見で氾濫したうえに下流部では計画高水位を越える大洪水となり、岐阜市忠節地点では、計画流量を大きく上まわる毎秒五五・六〇mが観測され、上流部の芥見などでの氾濫水量を加えると、既往最大の毎秒七四〇〇mの洪水であったことがわかりました。

参考文献

『伊勢湾台風復旧工事誌』 昭和三八年四月一日

建設省中部地方建設局

『伊勢湾台風災害復興誌』 昭和三九年一〇月

愛知県

『昭和34・35・36年連年災害復興誌』

昭和四〇年二月 岐阜県



河川改修工事が生み出した

石材（川石）の需要

松田 千晴 氏



松田 千晴 氏

1955年(昭和30年)岐阜市に生まれる。昭和53年、小学校教員となり以後、岐阜市歴史博物館、岐阜県教育委員会事務局図書館建設推進室、岐阜県博物館等を経て、現在は岐阜市立鷺山小学校勤務。『木曾三川流域誌』(建設省中部地建・平成4年)に執筆他。

デ・レーケによる木曽川下流改修工事に着手するにあたって用意された資材というのは、

「工事用材料の重なるものは石材及粗朶で、鉄線・縄之に亞き、木材も亦間接材料として多く使用された」（註一）とあるような種類のものではあつた。

ところで、デ・レーケは、我が国に

おいて古くから用いられてきた、河川
伝統工法の一つである蛇籠^{ヒナゴ}の有効性に
着目していた。母国オランダの王立技
術者協会が発刊する機関誌に、

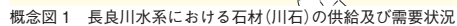
「蛇籠は急勾配の区間の堤防及び岸の防護として、しばしば起こる洪水の際の床止め及び洗掘防止のためのもの。

(中略)

籠を丈夫で、しながつて耐久的なものにするため、竹の間に鉄線の網を編み込む。こうすると、蛇籠は護岸用として適当な材料になる。」

(註2)

木曽川下流改修工事の具体的な内容については、残念ながら定かでない。しかし、断片的というものの以上の記述から、デ・レーケは、当時の木曽三川流域において入手可能な資材、つまり石材や竹・木材などを大量に用意し、同地域に適した古くから伝わる工法を駆使して、木曽川下流改修工事を推進したものと考えられる。



作図：松田千晴

二 船頭集落の分布

前述の資材の中で、少なくとも石材（川石）や木材については、地理的観点から見て木曽三川の下流域で入手することができない。特に石材については、中流域から入手する以外に方法はなかった。

明治中期の木曽川下流改修工事に石材を供給した地域・供給に携わった人々についての具体的な記録は未見であるが、改修工事が継続されていた昭和初期において石材を供給していたのは、長良川水系の場合、山県郡千足村千足・同郡春近村中屋・同郡せびき保戸島村戸田・同村保明・同郡巖美村加野・稲葉郡芥見村町屋の船頭たちであった。

岩石は、水的作用によって上流域から押し出され、下流域に近づくにつれて角が削られ丸みを帯びるとともに、形状もしだいに砂利や砂に近いものとなっていく。そのため、改修工事に必要な形・大きさの石材を大量に集める

ことができる区域というものは自ずと限定されてくるとともに、運送手段にも大きな変化が見られなかったことから、昭和初期の石材の供給状況といえども明治中期に近い様相を示していたものと推測される。

そこで、昭和初期における石舟の活動状況から、木曾川下流改修工事に対する石材の供給状況というものに迫っていきたいと考える。

三 船頭集落・加野

石材の供給に携わっていた前述の地点の中で加野と町屋については、船頭の数が群を抜いて大きく特異な景観を呈していたことから、実際には半農半船頭の村ではあるが、長良川水系における船頭集落と考えることも差し支えないといえよう。そこで、現地調査を実施することができた加野を取り上げ、石舟の船頭集落としての景観と機能を明らかにしていくことにする。

昭和初期の加野では、二艘の大舟と一五〜六艘の小舟が活動していた。

大舟は、主として近在から運搬されてきた薪や割木・柴といった燃料を、中河原湊（現在の岐阜市湊町周辺）や三重県桑名湊に運送していた。また、小舟は、船頭自身が武儀郡美濃町や同郡洲原村辺りの長良川で採った石材を、下流域の護岸工事の現場や稲葉郡長良村の石問屋に運送していた。

ところで、当時の加野の人々の生

業は、「分布図1 大正末期〜昭和初期の山県郡巖美村加野の生業」のようであった。この図から、船頭たちの家が堤防の近くに集中していたことが分かる。ところで、かつての加野の堤防というのは現在の半分ほどの規模であり、その内側には竹藪と墓地在り広がっていたらしい。そのため、加野の集落は現在よりも西に位置していたが、舟の仕事に便利になると、いつの間にか船頭たちの家が堤防（長良川）の近くに建てられるようになったという。

四 石舟の活動状況

石舟で生計を立てる船頭は、夜明けを待って加野を出発し、竿をさしながら上流に向かった。一般的に、一艘の石舟には一人の船頭が乗り込み、常に変化する流れの中で進行方向を定めつつ、流れに逆らって石舟を遠く離れた場所まで上らせなければならなかったことから、まずもって石舟を移動させるだけでも重労働であったという。

適当な大きさ・形の石材を集めることができる美濃町や洲原村辺りの川原に石舟が到着するのは、昼飯どきであった。その



分布図1 大正末期〜昭和初期の山県郡巖美村加野の生業

作図：松田千晴

ため、船頭は川原や川底における石材の溜まり具合を確かめ、玉石(十貫目余)やそれよりもやや小さめのグリ石と呼ばれる石材を採る場所の見当をつけた後で、メンパ(弁当箱)を広げて腹ごしらえをした。

準備を整えた船頭は、川底に錨を投げ込んで流れの中に石舟を固定し、長さ二間余もある檜製の柄の先に金属製の短い棒を付けた、ドンコと呼ばれる道具で、石を掘り起こしていった。必要とされる玉石やグリ石の多くが、川底の泥の中に埋まっていたからである。

次に、掘り起こした石材を、石鉤いしかぎと呼ばれる道具を使って、川底から石舟の中に揚げていった。石舟いっぱい石材を採るまでには、一〜二時間ほどかかったという。ちなみに、石舟には三百貫目余の石材を積むことができた。玉石一個の重さが十貫目余であったため、玉石ならおよそ三十個積んだ勘定になる。

石材を積んだ石舟は、流れにまかせ



加野の船頭が用いたドンコ



加野の船頭が用いた石鉤

なお、岐阜市加野の大野恒二(明治三六年生)・清水一市(大正一二年生)・山田弘(昭和一六年生)の三氏には、加野における河川水運について

て下ってくるだけであったことから、加野に到着するのは午後三〜四時になった。そのため、船頭は、石材を積み込んだままの状態です舟を堤防の外に留め、夜明けとともに下流に向かって出発したのである。石舟の目的地は、主として下流域の護岸工事(川普請といた)の現場であった。玉石の場合は、洪水が川底を削る作用を防ぐ施設、すなわち沈床用ちんしょうの石材として使われていたという。

ここで玉石を下ろした船頭は、帆を上げ、安八郡墨俣町まで上ってきた。船頭は、ここに石舟を留めてその中で一夜を過ごし、翌朝、夜明けとともに出発して午後二〜三時頃には加野に到着した。

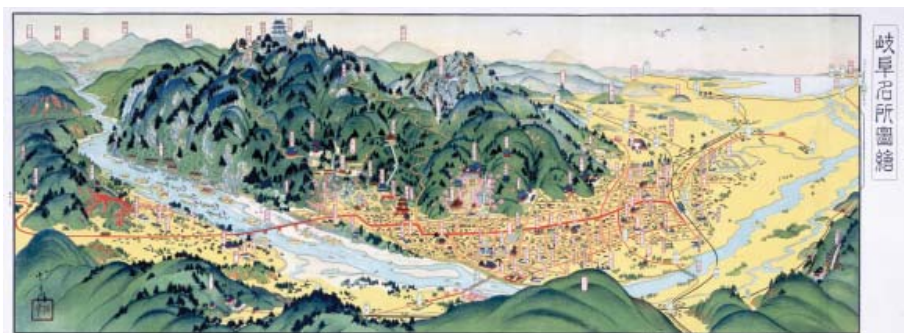
石舟がいつごろから活動するようになったか定かではないが、明治の中頃に改修工事が始まって石材の需要が生まれてきたため、大舟から石舟に商売替えをする船頭が見られるようになった、という話が加野に伝わっている。

大量の石材に対する需要を生み出した改修工事こそが、石舟の登場を促したということは十分に考えられる話である。そうであるとするならば、近世における木曾三川の御手伝川普請のころ、すでに石舟の活動が見られたのかも知れない。また、長良川中流域の船頭は、石材の供給を通して国家的事業である河川改修工事の一翼を担っていた、ということもいえる。

以上の内容を現地調査にもとづいて概念化したのが、「概念図1 長良川水系における石材(川石)の供給及び需要状況」である。

五 おわりに

て聞き取り調査をさせていただきました。最後になりましたが、厚く御礼申し上げます。



『岐阜 名所圖繪』(米内北斗 岐阜市 大正14年) 個人蔵
山県郡巖美村加野の船頭たちが石舟に乗り、石材(玉石やグリ石)を長良川下流域の河川改修工事に供給していた頃の、長良川の状況を描いた鳥瞰図である。加野の船頭たちが石材を採取したのは長良川の川幅が狭くなっている山間部の川原や川底であり、石材を供給したのは伊勢湾に近くなる低地の護岸工事現場であった。

註及び引用文献

1…『岐阜県治水史 下巻』(岐阜県 昭和二八年)二九二頁

2…『デ・レーケとその業績』(建設省中部地方建設局・木曾川下流工事事務所 昭和六年)七三〜七五頁

大ほら貝と白ぬけ

久瀬

むかしむかし、西津汲の蟻山と三田倉山の境の尾根に、大きな池があつて、そこにはそれはそれは大きなほら貝が住んでおつたそうじゃ。

ある大雨の夜、西津汲の庄屋の夢にその大ほら貝があらわれて、「庄屋さん、長くお世話になったが、わたしは今晚、池を出て、川を下つて海まで行くことにしました。」と告げました。

これを聞いた庄屋は、「これは、大変なことになったぞ。」と思い、大ほら貝に頼みました。

「もし、西津汲の方から下られるなら、村は全滅してしまいます。どうか三田倉山の谷の方から下ってください。」

まもなく、ドドドッという大きな音がして、池の水と石が山から落ちていきました。水と石は三田倉山の谷を下つていったので、西津汲の村は、無事でした。

翌朝、村人たちが池に行つて見ると、池は白ぬけ(崩壊地)になつていて、あとかたもありません。そこから三田倉の谷を見下ろすと大ほら貝が通つた跡が白い帯のようになっていました。



木曽川文庫利用案内

木曽川文庫



《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

《休館日》

毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》

無料

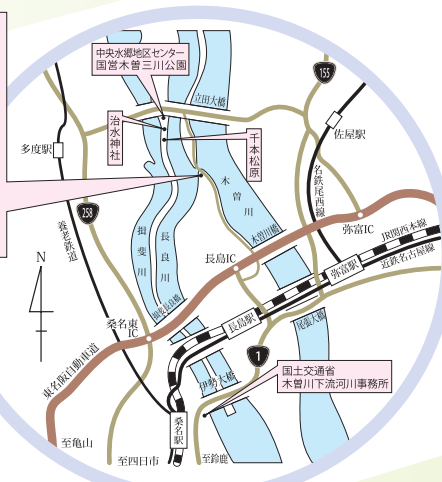
《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

表紙写真▶ 左: 揖斐川 右上: 揖斐峡 下: 夜叉ヶ池



木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

ぶんこだより

●歴史ドキュメント「伊勢湾台風」特集を開始

昭和34年の伊勢湾台風襲来から、来年秋には50年目を迎えます。半世紀という区切りにあつて、この史上最大の台風災害をさまざまな角度から振り返り、これからの防災を読者のみなさんとともに考えていきたいと思います。

●ホームページからのお問い合わせ募集

ホームページから問い合わせいただけるメールを新設いたしました。

まずは下記アドレスからホームページへ

<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

「お問い合わせ」ページの「メール」をクリック!

木曽川文庫では、蓄積されている地域情報を提供するとともに、いただいたご意見・ご要望をふまえ、読者のみなさまが、どなたでも理解しやすい構成とするよう内容の充実につめていきます。

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

宛先
「KISSO」編集

FAX: (0567) 24-5166
mail: kisogawabnk@mist.ocn.ne.jp